

## 情念を歌にこめて 夕刊フジ学芸部 丸山正一

鶴田とのつき合いは、公私にわたってもう二十年以上になる。それでいて、二、三ヵ月も顔を会わさないことがしばしばである。親しい友だちとの関係は、それでいいと思っている。まして、彼が俳優（と同時に歌手でもあるので）のお蔭で、スクリーンやブラウン管を通して会えるので、いつも身近にいるようで、時たま面と向かって会うと、新鮮で話題も豊富になり数ヵ月間の空白は一瞬にして埋まってしまう。“故旧忘れ得べき”という言葉があるが古い友人は、人間にとっての何物にも変え難い無形の財産である。

しかし、幸せなことに私には彼は有形の財産だと思っている。それは、彼は俳優であると同時に歌手だからである。数ヵ月も会わないと、無性に会いたい、話したい衝動にかられるときがある。そんなとき、私はレコードケースから彼のLPを引っ張り出して歌を聴く。古い歌から新しい歌への流れの中に浸っているうちに、いつしか二人だけの世界になる。寂しいとき、悲しいとき、うれしいとき、そのおりおりの心境で歌の味わいは違うが、和やかな気分誘われるのである。不思議なことに、一曲一曲にいろいろな鶴田像が脳裏に浮かんでくる。“街のサンドイッチマン”を聴いていると、当時（昭和28年）の甘いマスクをした多感な若き日の頃が思い出される。その頃、彼は松竹にはなくてはならない看板スターだったが、その彼が松竹を離れて独立プロをつくる、つくらないでマスコミを騒がしていた。松竹が当時のドル箱スターをそう簡単に手離すわけがない。しかし、鶴田という男は、思いこんだら後へ退かない一本気のところがある。敢て、温床の松竹を飛び出して俳優として生きる道を選んだ。“雲ながるる果てに”（昭和28年6月）、“日の果て”（昭和29年）、“叛乱”（同）といった、いままでの鶴田にみられない俳優としての新生面を開拓して、その芸の幅を広げた。その俳優としての信念の強烈さを見直したのもその頃である。一方、彼の歌のヒットをレコード会社が放っておくわけがない。“映画俳優の鶴田浩二”に、つぎつぎと新しい歌を世に出しヒットさせた。そうした歌のヒットに照れたのか、彼はよく歌のステージで「映画俳優の鶴田です」と謙虚に自己紹介してきたが、彼をよく知っている人たちは、ちょっと苦笑したくなる。ファンは先刻ご承知なんだが、そうした鶴田のポーズにたまらない魅力があるらしい。事実、仕事を離れて彼と接するときは、赤ちょうちんで肩を並べて安酒を飲み合う仲間同志の姿にしか、他人には見えない庶民的な一面がある。

彼の歌については、まったく音痴で、その歌手鶴田浩二の歩みを語る資格は無いが、それでもいま流行のカラオケ・ブームのお蔭で、バーや一杯飲み屋で、“赤と黒のブルース”、“好きだった”、“傷だらけの人生”、そして多少なりとも戦争経験のある世代が“同期の桜”をリクエストすると、彼らと口ずさみ一抹の優越感を抱いて、彼と友人であることの誇りと満足感を持つのである。

独立プロから大映、東宝、東映と移り俳優としての多難な遍歴を経て、尾崎士郎氏の代表作、“人生劇場・飛車角”（昭和38年）の成功で、東映の“任侠路線”の口火を切り、故内田吐夢監督の傑作“飛車角と吉良常”（昭和43年）まで、尾崎文学と鶴田の出会い、俳優として、歌手として無視出来ないものがある。

尾崎氏は昭和39年2月19日亡くなられた。その日、鶴田と私はお互いの家族と共に、志賀高原でスキーを楽しんでいた。同日、その悲報を聞いたとき、ホテルの泊り客のダンスパーティーの最中、“尾崎先生の冥福を祈って”と、バンドに“人生劇場”の演奏を注文して歌った。一瞬パーティーの雰囲気は静かになり、彼の絶唱に聴き入り、歌い終わっての拍手、そして、彼の涙ぐんだ神妙な姿はいまも鮮かに臉の底に焼きついている。

そうした彼の歌手としての姿勢が、たんなる俳優の副業としてではなく、尾崎氏のエピソードを一例として、いまも続けている彼と同世代の戦争犠牲者で南方に眠る仲間たちの故国に還らない遺骨収集の基金を二十年来投じていることを思うと、彼の歌ごころは国を愛する至情と、同世代への限りない思いやりあふれたものと、友人としていつも自責の念を感じているのである。

私は、鶴田の歌の集大成として歌話組曲“名もない男の詩”が大へん好きだった。この歌は“花も実もある俳優鶴田”が、腹の底からしぼり出して歌う人間讃歌の詩であり、貧しい弱い者への思いやり、権力者への怒りをこめた、鶴田個人ではどうにもやり切れない心情を託した雄叫びの声だと思っている。

俳優、歌手としての鶴田の心情をふんまえて、彼の演技を見て、歌を聴いてもらいたいことを友人の一人として、多くのファンに熱望したいのである。